

だけがアジア的存在様式の特徴を身につけるだろう。日本は多くの人々がそう思っているように、自分の文化にヨーロッパの技術をつけ加えたのではなく、ヨーロッパの科学と技術が日本の特性によって裝飾されたのだ。実際生活の基礎は、たとえ、日本文化が——内面的な区別なのだから外観ではよけいにヨーロッパ人の目にはいつてくるから——生活の色彩を限定しているにしても、もはや特に日本的な文化ではないのであって、それはヨーロッパやアメリカの、したがつてアーリア民族の強力な科学・技術的労作なのである。これらの業績に基づいてのみ、東洋も一般的な人類の進歩についてゆくことができるのだ。これらは日々のパンのための闘争の基礎を作り出し、そのための武器と道具を生み出したのであって、ただ表面的な包装だけが、徐々に日本人の存在様式に調和させられたに過ぎない。

今日以後、かりにヨーロッパとアメリカが滅亡したとして、すべてアーリア人の影響がそれ以上日本に及ぼされなくなつたとしよう。その場合、短期間はなお今日の日本の科学と技術の上昇は続くことができるに違いない。しかしわざかな年月で、はやくも泉は水がかれてしまい、日本的特点は強まつてゆくだろうが、現在の文化は硬直し、七十年前にアーリア文化の大波によつて破られた眠りに再び落ちてゆくだろう。だから、今日の日本の發展がアーリア的源泉に生命を負つてゐるところもまた同様、かつて遠い昔にもまた外国の影響と外国の精神が当時の日本文化の覚醒者であったのだ。その文化が後になつて化石化したり、完全に硬直してしまつたという事実は、そのことをもつともよく証明している。こうした硬直は、元來創造的な人種の本質が失われるか、あるいは、文化領域の最初の發展に動因と素材を与えた、外からの影響が後になつて欠けてしまつた。

う場合にのみ、一民族に現われうる。ある民族が、文化を他人種から本質的な基礎材料として、うけとり、同化し、加工しても、それから先、外からの影響が絶えてしまふと、またしても硬化するということが確實であるとすれば、このような人種は、おそらく「文化支持的」と呼ばれうるが、けつして「文化創造的」と呼ばれることはできない。

この観点から個々の民族を検討するならば、存在するのはほとんど例外なしに、本来の文化創始的民族ではなく、ほとんどつねに文化支持的な民族ばかりであるという事実が明らかになる。常に、民族發展の次のような概念が生る。

すなわち、アーリア種族は——しばしば、ほんとうに奇妙なくらいの少ない人数で——異民族を征服し、そして新しい領域の特殊な生活環境（肥沃さ、風土の状態等）によつて刺激されつつ、そしてまた人種的に劣つた人間を多量に補助手段として自由に利用することに恵まれつゝ、かれらのうちに眠つていた精神的、創造的能力を發展させる。かれらはしばしば数千年、いや數百年もたたぬ間に文化を創造する。それらの文化は、前にすでに触れておいた、大地の特殊な性質や、征服された人間に調和しながらも、自己の存在様式の内面的特徴を、初めから完全にもつているのだ。だがついに、征服が自分の血の純粹保存という、最初は守られておいた原理を犯すようになると、なれば、抑圧されている住民と混血し始め、それとともに自分の存在に終末をつける。というのは、樂園での人間の堕落には、相変らずそこからの追放がまつてゐるに違ないからである。

千年以上もたつた後、抑圧された人種に征服者の血液が残した白味がかつた皮膚の色合いの中